
世界救出旅行記

なんか てる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界救出旅行記

【Nコード】

N8184U

【作者名】

なんか てる

【あらすじ】

発展と衰退を繰り返す無数の世界。世界の崩壊に嘆いたそれは一人の少女を産み落とした。その存在と引き換えに。少女は世界をそして少女の日常を守り、世界を渡る、幾多の世界で仲間を増やしなから。これは少女が悩み、苦悩し、皆の助けを借りながら、世界を救い、そして人ならざる存在から人へと成長していく、数々の世界での物語です。

出会い（前書き）

なにぶん小説を書くのは初めてのため、おかしな表現があったり見辛かったり、誤字脱字、話のつながりにおかしいのでは、といったことが多数あると思います、そういったことで気分を害する恐れがあります先に謝っておきます。なるべく誰もが分かりやすい内容になるよう努力していきたいと思いますのであたたかい目で見守ってやってください。

出会い

町外れの小高い丘の上の庭仕事から私の一日は始まる、と言っても趣味の範疇であり別にこれが苦というわけではない。

庭に咲く色とりどりの花々は自慢の逸品である、語りだすと長くなるので割愛するが、季節に沿った花々が順調に咲いていくさまは、いつになっても心揺さぶるものがあるものである。

その後部屋に戻り朝食を軽く取る、今日も紅茶がおいしい。

朝食が住むと外套とハットをかぶりステッキ片手に街に向かう、もう何十年と繰り返してきた日課である。

「やあフィリングスさん、今日もお元気そうで」

「君も元気そうで何よりだよ」

「当たり前ですよ、俺が元気でなかったら誰がここを守るんですか
！！　なんて、あはは」

少年にしてはとて人当たりのいい彼はこの国の王国騎士団所属である、いつも元気に門番をしている。

満面の笑みで手を振ってくれる彼を背に街に入っていくのが最近の

朝の風景となりつつある。

大通りは今日も、行き交う人々で賑わっている。

行きつけのマスターのところへ向かおうと通りを外れた裏道に出る。喧騒から外れたこの道は少し小汚いが、これぐらいで丁度いい。

綺麗に飾られた大通りとはまた違った美しさがある。

忘れられたこの路地は切り取られた別世界の静けさに包まれている、ゆえに、その上品でない少年の声が私に届いたのかもしれない。

角を曲がり目に飛び込んできた光景はいわば裏の日常でもあった、けれどその中心にいる人物だけは、この切り取られた世界の日常からも更に切り離されていると私は感じたのであった。

「ねえねえ君君、そんな格好でどうしたの？ お兄さんたちが着るものを貸してあげるよ、付いてきな」

セリフだけ聞くと親切に聞こえるそれも、着崩した服装の青年達が5人で一人の少女を囲んでいる状況では、その言葉の通りには受け入れられはしないだろう。

そしてなにより、その少女が一番この路地において騒々しかった。生まれたままの姿で立ち尽くす少女、透き通る白い肌、純白の髪、黄色、いや金と銀の、まるで物語の妖精のような、そんな幻想的なオッドアイをしている、顔はとても幼く、見た目には140ほどし

かないためおそらく10歳そこらだろう。

何一つ映していないようなその瞳が現れた私を捉え続けている、表情は一切替わらない、人形だと言われても信じられるだろう。

青年らが集まるのも無理は無い、彼女にはそれだけの商品価値があるのだろう、なんとも嘆かわしいことである。

けれど私にはそんなことは関係なかった、彼女の目は私を捉えて離さない、私も彼女に不思議な雰囲気を感じ立ち止まってしまっている、いや、周りの音が聞こえず彼女にだけ集中している。

恋やどうかという感情ではなく、彼女の容姿に驚いたわけでもない、ただそのなにも映していないその目に私は興味をいだいたのだろう。微動だにしない彼女とその視線に気づいたのだろうか、こちらに向く5人の青年達。

全てはこれが始まりだった。

カランカラン

裏路地にある少し暗いこの喫茶は私の行きつけである。

少しだけ薄暗い店内に、仄かな明かりが醸し出す老舗な雰囲気はと

ても落ち着くものがある。

先代の頃から通っているが現マスターも相当の腕である。

「いらっしやい、エイルズさん」

ドアに吊るされたチャイムが鳴り響く、このカランカランという音に少しわくわくするのは私だけの秘密である、顔に出したことはない。

「マスター、いつものやつを……この子にはミルクを頼む」

そう言われて初めて気づいたのか私の外套に着られている少女に目を向ける

「……何か違うと思えば、外套を脱いでたからだったんですね」

目を驚愕しているという風に目一杯開いているところを見ると、咄嗟に叫びそうになったことは想像に難くない、聞きたいことも色々あるだろうに、それを言わない彼はさすがは店のマスターと言ったところである。

マスターの正面、カウンターの定位置に腰をかける、少女はなにも言わず隣に腰掛け……れなかったようで必死によじ登っている

「ところでエイルズさん、どこから攫ってきたんですか？」

とてもいい香りを引き連れ、裏から戻ってきた彼は開口一番に寝ぼけたことを言っている。

これが彼のいいところでもあり悪いところでもあるのだが。それにしても、いつも私以外の客を見ないが彼はどうしているのだろうか、裏路地にあることを差し引いても、もう一人ぐらい来ているもおかしくないであろうに。

「……」

「……」

「ごめんなさい、僕が悪かったです」

殊勝な青年である。

「えーっと、そうですね、ついさっきこの城下町上空に随分と綺麗な大規模魔方陣が展開されていましたから、おそらくどこかの魔法使いがおちゃめに雷でも落としたんじゃないですか？　ところでエイルズさん、彼女、服は着せゴフツ！？」

沈黙に耐えられなかったのか、コーヒーマーカーを用意しながら自分の予想を次々と述べている、案外当たっている所がすごい、ただ最後のは相当痛そうだ。

どこから現れたのか、マスターの奥さんが騎士団も真つ青な綺麗なストレートを決めている。

彼女の動きはなかなかのものがある。

「あなた、少女の柔肌をジロジロ見るなんて……荷物が届いてるのちよつと裏まで来てくれる？」

「ち、違つんだメアリーこれはそういうのではなくて、純粹に心配を、それにエイルズさんのコーヒーマスターがまだだし、て、あつ！ちよつと落ち着け！！落ち着いて、落ち着いてくださ………」

引きづられていく片手間に全てを用意し終えているあたり、尻に敷かれるのに慣れてしまっているのであることが伺える、その手際を褒めるべきか呆れるべきか……

それにしてもマスター、先代からこの店を引き継いで間もないというのにこの味はすごいものがある。

いつになっても動こうとしない少女にミルクの飲み方を教える。

両手でぐっと持ち、口に持つていつている、このぶんなら心配はいらなさそうだ、物分りはいいようである。

私もコーヒーに口をつけていると奥さんが裏から戻ってくる、拳を握りしめていたのにその手に腫れがないところを見ると、なかなかのやり手である。

「うちの主人がごめんなさいね」

嫌味のない笑顔で少女に語りかけている、相変わらず少女の方は人形のように微動だにしていない。

「彼女は？」

素朴な疑問を聞いてくる、確かに店側としては正しくない質問だが、私ももう顔なじみである、これくらいはなんてことはない、少女が外套以外にも着ていない事がなおさら気になったのであろう。

「ここに来る途中で青年達に絡まれているのを見かけてね」

「なるほど……服は、そうねえ、私のお古でよかったら着ておく？ ほつれてないのを見繕ってあげる」

「すまないね、なにぶん女性の服というものには疎くてね、頼んでもいいかい？」

「任せておいて、何たってこんなに可愛い子だものおしゃれしないとね」

でも、エイルズさんなら問題なく服を見繕えそうだけど、と言い残して少女の手を引こうとする、私のことを少し買いかぶり過ぎである。

ただここに来て問題があった、少女が一切動こうとしないのである。

「どづしたの？」

彼女の疑問はもつともである。

「あー、そうだね、彼女が服を見繕ってくれるそうだから行っておいで」

私の言うことは聞くらしい、少女はそーっと椅子から降り、彼女の後ろについた。

私の言葉にしか反応しないのは刷り込みのようなものだろうか？
なにせよ少女は見た目相応の思考は持っていないように見える。
言ったことはしっかりこなせるようだから、知恵が遅れているということはないであろうが、後でしっかり話す必要があるそうだ。

「それじゃあ行こっか」

少女の口周りについたミルクを拭いたあと、半ば強引に手を引いている彼女の顔がキラキラと輝いていたのは、母性本能的なあれだろう、少女には少し悪いことをしたかもしれない。

「おかえりマスター、怪我はないかい？」

「ははは……あれは条件反射だったみたいで、それ以降はなににもされてませんから……ははは、はははは」

少し壊れているぞマスター……

「ところでなにがあっただんです？ エイルズさんが人を連れてくるのなんて初めてですし、ましてや幼い少女となると結構気になりますよ？」

「いやなに、ここへ来る途中に青年に絡まれているのを見てね、それだけのことだよ」

「あ、割と予想通りだったんですか、さすがは元王国魔道士、若い人なんて一捻りなんですね」

「老いぼれを買いかぶり過ぎだよ」

「これまたご謙遜を」

マスターと何気ない話をしていると少女を背に隠し奥さんが戻ってきた。

その顔がとても満足しているのはおそらく、文字通り少女を着せ替え人形にしたのであろう。

「じゃーん」

そう言っつて少女を前に押し出す。

感想としては少し意外だった、奥さんのことだからもつと着飾らせると思っていた、相変わらず無表情な彼女だが服装はなかなかどうして似合っている。

というより、割と質素にまとまっている、裾と袖口、首周りに少しフリルがある足首まである白一色のワンピースだった。

私が意外そうな顔をしていることを見ぬいたのか、奥さんが少し頬をふくらませて説明してくれる

「似合わなかったわけじゃなくてね、逆に質素な服のほうが彼女の可愛らしさを惹き立たせるのよ」

別に他の服を持ってないとかじゃないんだからと、少しご機嫌斜めである、そんな顔に出ていたのだろうか？

まあ、言われて見ればそうである、彼女の言うように少女ならもつと色鮮やかな服でも似合うだろうが、こちらのほうが少女が引き立っていていいかもしれない。

「本人の前でこんな事言いたくないのだけれど、もしかしてこの子って喋れないのかしら」

割と唐突ではあるけれど奥さんが口を開く。

「服を選んでも、うんともすんとも言わないのよ？」

「それは僕も気になってた、どうなんだいエイルズさん？」

私としてもそれは気になっていたことだ。

ここに来る最中もついては来るが、何一つものを言わない少女のこととは気にはなっていた。

当の本人は相も変わらず彫刻のようにじっとしている。

「本人に聞いてみよう、そうだな、名前はなんと言うんだい？」

今まで私の言葉にはかろうじて従っていた彼女もこれには答えなかった。

「もしかして、名前がないんじゃない？」

マスターが言ったその一言はひとつの仮説を裏づかせる発言だった。

「まさか、でもそれなら説明がつくわ」

奥さんも思いついたようだ、ただしマスターの思っている名前がないというのと私たちが思っている名前がないということは、言葉は同じでも意味がだいぶ違ってくる。

「あなた、それ意味わかって言ってる？」

「名前がないんだろう？」

わかっていないようだ。

人は生まれてくるときに親に名前をもらう、この星における常識である、なぜならば名前とはすなわち、うちに存在する魔力を抑える器であるからだ。

ゆえに名前を持たない存在はなくそのような存在は生き残ることはできない。

魔力のある者にとって名前とは一種の呪いのようなもので偽名を名

乗ることはおろか、黙秘することはできない、これは魔法使いなら誰でも知っている常識なのだから。

ただ世界には名前を持たず生まれてくる存在もある。

人ならざる存在である、魔法が存在するこの星において魔法生命体と呼ばれる存在のことだ。

魔の物と呼ばれる存在である、それは時として、天使とも悪魔とも、また、精霊とも呼ばれる者が生まれることもある、そんな存在である。

それが生まれてくる理由も課程も一切が謎ではあるけれど、それなら説明がつく。

少女がなにも纏っていないなかった理由、誰の声にも答えなかった、一言も喋らなかつた理由。

私の言うことを聞いて行動しているあたりこれが正解ではないのだからうけれど、少女は人ならざる存在。

いわば精霊のような存在であるということだ。

そして少女は、生まれたばかりであるということである。

出会い（後書き）

文章投稿は初めてですのでかなりドキドキしております、お見苦しい点はなかったでしょうかねえ……緊張で心臓が張り裂けそうだし……。

成長

「つまり精霊かもしれないということか？」

奥さんに説明されてやっとマスターが理解したようだ。

この仮説が当たっているとすれば、少女から感じていた不思議な感覚もそれで説明がつく。

「なるほど、この魔力ならざる感覚もそういうことか」

「そんなのを感じ取れるのは魔法使いでもエイルズさんだけです！

！」

旦那の理解力のなさにつかれたのか私に対する言葉に怒りが少しこもっている、やつあたりである。

それにしても私も長生きしている方だが、こういった存在に会うのは初めてである、書物でしか見たことがない存在なのだ。

「ならば、とりあえずは名前をつけてやるとするか」

そうすれば少女ももう少し安定できるはずである。

「そうね、なにがいいかしらねえ、やっぱりかわいい名前にしない

とね

「なら、キャンディー」

「却下」

「はい」

彼らは放っておくとして、少女にぴったりの名前がある。
私としてはこれ以外にないであろうという名前だ。

「しろ、白と書いてしろというのはどうだ？」

「いや、エイルズさん犬じゃないんですから」

「いいわね、さすがエイルズさん」

なんとも温度差のある夫婦である。
名前をつけたおかげだろうか、初めて少女が声を口にした。

「……………し……………る……………」

その声はとても透き通っていて、自然と耳に残らないとても綺麗な、
まるで自然と一体化したような声だった、少し言い過ぎだろうか？
ただ私にはそうきこえたのである。

「いいあなた？ あなたは喫茶店バカだからこの店以外のことには疎いのだらうけれど」

後ろでは夫婦の仲睦まじい様子が繰り広げられている。

名前のおかげだろうか、白はだいぶ歳相応に見える可愛らしい表情になってきている。

白が精霊かはわからないが、名前がキーとなり存在が安定するといところからそれに類する存在であることは間違いないのであろう。ところでなぜ白なのか、白、といってもその意味は多岐に渡る、そもそもこれは古代言語である、私のような年寄りが知っているならまだしも、奥さんが知っていることは驚きである、マスターが知らなくても当然なのだ。

髪が純白だとか、肌が色白だとかそういう安直な理由ではなく、れつきとした意味がある、全ては説明されていないけれど、白というのは何色にも染まることのできる色を表す、ただその色は絶対に混ざりきることはなく、他の色を惹き立たせる。

古代言語の意味としては、それは無限の可能性と助け合いを意味する、一人では味気ないそれは、他の色と手をとり合い新たな色を作り上げる、これにはそういう意味が込められている。

なんとも年甲斐も無く恥ずかしいセリフを並べてしまったものである、なにが言いたいのかというと、ただ白に私は、この広い世界を見て欲しいと思っただけのことである。

「マスター、私はこれくらいで帰るとするよ、服に関して礼を言う、またお世話になると思うがよろしいだらうか」

「あらもう帰るの？ 服の事ならまた明日にでも買物に付き合っ
てあげるからよってねエイルズさん、白はエイルズさんが？」

帽子をかぶり直し立ち上がる。

「そうするとしよう、なに、名付け親が世話を見るのが道理という
ものだろう」

「エイルズさんなら心配ないと思うけど、いい？ 白が何者であっ
ても女の子にはかわりないんだから」

「メアリー、いくら何でもそれはエイルズさんに失礼だよ」

改めて白に向き直る、割と表情が崩れてきている、こうしていると
歳相応の女の子といった感じで可愛い、私としては孫を見ているよ
うな感じではあるが。

「ははは、レディーの扱いとは、相手が子供であれ、細心の注意が
必要ということだ」

外套を羽織り、白の手を引き喫茶店を後にする、ああはいつたもの
の、白の未来が私しだいということになると、年寄り臭くならない
か心配である。

門をくぐる、行きしに挨拶をした彼は立派に佇んでいる。

「今日は早いですねフィリングスさん、その子は？」

「この子は今日から私と一緒に住むことになってね、白という」

驚きに目を見開いている。

それにしても白は相も変わらず見知らぬ人に対しては無表情と沈黙を保っている。

「白さんですか、よろしく〜」

「……」

「すまないね」

「いえいえ」

彼に見送られながら帰路に着く、普段なら昼も街で過ごすのだけにと白に悪いだろう、今日からは家での生活が主体になる。

いつもと同じわが家のある丘に向かう少し森に囲まれた帰り道も、一人増えただけでとてもにぎやかなものとなっていた。

家につくと白は私の自慢の花々に目も向けず後ろを付いてくる。

少し悲しい物があるけれど、まあ仕方ないのだろう、これから色々なことを教えていくのだから。

家上がった後も白は周りには目も向けず、私の後ろをひたすら付いてくる。

こんな事なら家政婦を雇っておけばよかったと、この時ほど思ったことはなかった、椅子に座らせたはいいけれど家にはミルクも、子供が好きそうな飲み物もなく、出せると言っても紅茶ぐらいしかない。

仕方ないから紅茶を出すとして、どうするべきなのだろう、物を教えるとしてもなにかから教えるべきなのか、言葉を理解していることから何らかの知識は有していると思われる。

私としたことが帰ってくる前に絵本を買ってくればよかったと今になって後悔する、私も白のコトで精一杯だったということが。

「読んでみるかな？」

とりあえずしようがないので書齋にある書物の中で、わりと生活に重きを置いた物語を取り出す、相変わらず白は無表情でそれを受け取る。

逆から読もうとしたので読む手順を教えて紅茶を出しておく。

背はテーブルには届いているようなので心配しなくてもいいだろう

……

案の定ミルクに比べて苦かったのか、紅茶は一口くちをつけた後、困惑した顔を浮かべ、それ以降は手をつけていない。

本については読んでいるのかいないのか、なにも言わず黙々と一定の速度でページをめくっている、とりあえず渡した本だというのに読めてしまっているのか？ 思わぬ誤算である。

読んでいるのなら何か喋って欲しいところである、知識はあるけれど発声がわからないということか？

「どうかな？ 読めるか？」

「……」

うんともすんとも言わない、発声を教えるところから入るべきか。

「白、これはあいさつだ」

隣に座り、同じ所を読みながら声に出して行く、出来る限りゆっくりと。

「あい……さ……っ……」

「そう、挨拶だ、これはこんにちはと発音する」

こうして昼までの少し短い時間ではあるけれど言葉というものを教えることとなった。

白は割と物覚えの良い子だった、いや良すぎるといったところか。演技でもしていたのかと思うぐらいにそのもの覚えの良さは異常だった、こちらが教えたことはすぐに覚える、それこそ一字一句残らず復唱する、声はたどたどしいけれど。

それに反して教えていないことは一切わからないと言った状況だ、その異常さがうかがい知れるだろう。

けれど、そんなことはどうでもいいことなのだ、物覚えがいいのならばこれから色々なことを覚えていけばいい、少し変わっていいようがそれがどうということはない。

時折首を捻るようになった白、この調子なら昼には少しぐらいは喋れるようになっていいるだろう、今から楽しみである。

その後白は疲れを見せず、むしろこちらのほうが疲れて参ってしまったため、昼食の準備と理由をつけて私は先に切り上げた。白の学習能力には驚かされる、これなら明日の買い物は白任せにできるかもしれない。

そうこうしているうちに、簡単な昼飯が出来上がった。
とは言え、普段から昼はマスターのところでしたくため、即席の
軽いものではある。

「白、お昼にしよう、本を片付けておいで」

私がそう言つと白は、綺麗に重ねていた分厚い本達を書斎へとふら
ふらとした足取りで運んでいった。
なんとも危なっかしい。
すぐにトタトタといった軽い足音を響かせて戻ってくる、さてテー
ブルに並べようか。

「ではいただくとしよう」

「んっ!!!」

白が胸の前で手のひらを合わせて何かを言いたそうにしている。
ああ、なるほど先ほどの書物に書いていた遠い地方の風習を真似て
いるのか、なんとも微笑ましいものである。

「ははは、そうだな、ではいただきます」

「いただきます」

こちらの様子をうかがった後私に続いてスプーンを握る。
今日のメニューはオムライスである、手軽でおいしい定番メニューだ。

白はまだ味がわからないのか何食わぬ顔で黙々と食べている。

「どうかね？」

だから私はそう聞いた、白の返事は大体予想していたものであった

「ん？」

これから色々なものを覚えていけばいいのだ、なに焦ることはない時間なら嫌というほどあるのだから。

口の周りを真っ赤に染めて首を傾げる少女に改めてそう思ったのである

食事を終えた白の口周りを拭いてやり、これからどうしようかと思

案する。

とはいってもできることなど限られているのだが、まあ、とりあえずは白が何者なのか紐解いていくことにしよう。

「白、こっちにおいで」

そうやって膝の上に白を載せる、比喩表現でなく本当に羽毛のような重さの白からは、人ならざる存在であるということは十二分に感じることができる。

「自分のことについてなにかわかるかい？」

「……ん？」

意味が分からないのだろう、それもしょうがないことだ、白が何者であるかなんてそのうち分かること。

それにわかったからと言ってなにかあるでもない、生活に支障がないように、ある程度情報は欲しかったところではあったのだが構わない。

それもこれもいずれわかるだろう、考えてみれば私は少し焦りすぎている。

まだ出会ってから半日も立っていない、かつて王国魔道士とも言われた私がこの体たらくである、老いたものだ。

思案にふけっている時も白はじっとしていた。

そうだな、まずは色々と覚えていこう、どこまでやれるか分からないが、せつかく人型に生まれてきたのだから人間味あふれる可愛い

子に育ててあげよう、それが今の私に出来る精一杯のことなのだから。

白を床におろし手を引く、向かうは私の書齋、少しぐらいは童話などの本も置いていよう。

そうして夕食までゆっくりと、本を読むこととなったのである。

一つのこと集中していると時間というものはあっという間に過ぎるものである。

夕方になったので仕方ない、夕食を作るとしよう。

「白、私は夕食を作ってくるから待っているんだよ」

「うん」

言葉は短いけれど返事はするようになった。

全てを理解してはいない、おそらく待っているという言葉に反応しただけなのだろう。

それにしても、手のかからない子供というものがこんなにも悲しいものだとは思わなかった。

わがままを言ってくるぐらいのほうが可愛げがあると今になって思ったのである。

夕食はパスタにした、というよりそれしかなかったというべきか。白は人形のように無表情だ、もうこれは諦めよう、時間が解決してくれるはずだ。

夕食を食べた後は一番の問題が待っていた。

私は子供の世話をしたことはないのだ、当然子供の体を洗ったことはない。

相変わらず人形のように微動だにしないので、苦勞はしなかったがシャワーを終えた後の私がぐったりしていたのはしょうがないことである。

少しくつろぎ、お互いに熱気が冷めてきたあたりで白に声をかけた。

「これを大事に持っておくんだよ」

「これ？」

そう言っつて首を傾げる白に、金色の鎖がついたネックレスを渡す。先には懐中時計がついており、下の留め具を外すことで蓋を開き、中の文字盤を見る仕組みになっている。

これなら首から下げられるので、無くす心配も傷が付く心配もない、念の為に少しだけおまじないをかけておいてある。

「あり……がとう」

「感謝の言葉は大切だからね、よく覚えていたね」

先ほど読んだばかりだというのに。

「それとこれも渡しておこうか」

黒塗りのカードを白の手の中にしっかりと預ける。

「それは私のギルドカードだよ、使用者に白も入っているから心おきなく使うといい」

いまいちわかってないようで首をかしげている。

「明日喫茶店のメアリーさんと買い物に行く約束をしているから、その時に使うといい」

それでも可愛らしく小首をかしげたままだった。

詳しい説明をしても理解はできないだろう、もしかしたら白のコトだからわかってしまうかもしれないけれど。

まあ、マスターの奥さんが付いているのだ、万に一つも手違いが起ころうことはないだろう。

話をしていると時間はあっという間に過ぎる。

もう夜も遅い、幼い子供に夜更かしはいけない。

白はなんとも無いようだけれど、あれだけ目を酷使したのだ、明日に備えて眠るとしよう。

我が家にベットはひとつしかない、白が小柄でよかった。

最初はよくわかっていなかった白も、私の見よう見まねで眠りについたのであった。

成長（後書き）

修正に修正を重ね、なんとか投稿。

幼いことを表すために発言を減らしてみたら、なんかとっても薄っぺらくなってしまった気がする。

昔語り

差し込む朝日の眩しさと白が動く気配で目が覚める。

「おはよう、白」

「……おはよう」

寝ぼけているのか目をしばしばとさせている。
白を着替えさせて顔を洗ってやる。

時間が経つに連れて人間らしくなっていく、少し変化が早すぎて怖い気もするが。

軽く朝食をとった後はいつも通り街へと向かう。

「準備はできたかい？ 街へ行こうか」

外套を羽織り帽子とステッキを手取る。

まだ寝ぼけまなこな白の手を引き街へと向かう。

周りをきよるきよると見回している、注意するべきか成長に喜ぶべきか。

相変わらず門番の彼は元気がとりえのようだ。
大通りへと抜けて裏路地に入る。

「いらっしやい、白ちゃん」

マスターの奥さんが笑顔で飛び出してくる。
そんなに楽しみだったのだろうか。

「白のことを頼めるかな？」

「もちろんよ！ いきましょう！」

「……うん」

「しゃべった!？」

さすがにそれは驚きすぎだぞ。

驚きつつも奥さんはしきりに白へと話しかけている。

白も白でびくびくしながらもわかることには返事を返している、このぶんなら任せても問題ないだろう。

「言うておいで白、私はここで待っているから」

「え……っん」

少し驚いた後返事をして奥さんの後についていった。カランカランと音を鳴らしてドアが締まっていく。

「驚きすぎて声も出ないですよ、エイルズさん」

その割には声が出ているではないかマスター。

「白、もう話せるようになったんですね」

「昨日少し本を読み聞かせてあげたのでな」

「それだけで!？」

「若いものは物覚えが良くて羨ましいよ」

「もうそんなレベルの話じゃない気がするんですけど」

コップを拭きながらマスターは呆れた顔をしている。注文をしなくても用意してくれるようになったのは、もうだいぶ昔の話だ。

「それも気になってたんですけど、メアリーと二人で大丈夫なのか

も心配ですね」

「マスターの奥さんだろうに」

「そうですね、あんなに浮かれてるのを見るのは久しぶりですからね、なにが起るかわかりませんよ」

旦那がそれでどうする、思わず声にしそうになったが飲み込む。そういったマスターの顔は別に心配などしていなかった。

「はい、ホットでよかったですよね？」

「相変わらずの手際、見事だね」

「仕事ですから」

顔がにやけているぞマスター、クールに決めつつもりだろうに。相変わらず良い香りだ。

マスターが打って変わったように影を落としながら口を開く。

「こつ言っってはなんですが……」

そう言っつてマスターはもつとも言いたかったことを口にする

「どう考えても白の成長速度はいじよ、いえなんでもないです」

そこで言うのをやめる。

マスターもそうだが私も何度も思ったこと、白は誰が見るでもなく異常だとわかる。

けれど別に気にしない、ちょっとくらい変わってる人などいくらでもいるのだと、そう思うようにしている。

いや私は、何度もこの思考にはまっている、マスターも同じなのか。白を害するつもりはないが、人はただ異なるものを忌避する。

白が何者であれ私たちはただ安心したいだけなのである。ぐったりとした白が、この後奥さんに引きずられるようにして帰ってくるまで、答えのない思考の渦に捕まるのであった。

心なしかぐつたりしている白を連れて帰ってきた奥さんは、何か焦っているようだった。

「ちょっと！ エイルズさん、何ですかこのカード！」

なるほど、だいたい理解した。

白がぐつたりしてる理由はおそらく、奥さんに質問攻めにされた結果なのだろう。

もしかしたら着せ替え人形にもなっていたかもしれない。

「黒！ 黒のカードなんて初めて見ましたよ私！！」

「黒がどうしたんだいメアリー」

「黒よ、黒のカード！！」

何故か敬語になっている奥さん。

私を見つけた白が必死になって駆け寄ってくる。

軽くトラウマになっていないか？

それ程に奥さんが楽しんでいたのだろうか。

「黒のカードよ！？ 王国から認められたギルド員がもらえるって
いうあの黒なのよ！！ これが驚かずに要られますか！ かつての
魔王、現トップランカー、ギルドマスターの3人しか持っていないの
よ！！！」

何か因縁でもあるのか？

えらく熱がこもっている上にそれは、あまり知られていない事実なの
のだが。

我関せずを決め込み黙々とコーヒーに口をつけていた私にとつとつ
矛先が向く。

「それでどういふことなんですか！？ エイルズさん、教えてくださいだ
さいー！！」

「落ち着きたまえ」

「すみません、でもですね！ 黒ですよ！ 魔法使いなら一度は憧れる魔王の黒ですよ！！」

そういう理由で興奮していたわけか。

それならば尚の事話しづらくなってしまったが……

「そうか、夢がかなってよかったではないか」

「エ、イ、ル、ズ、さん」

満面の笑みを浮かべているが、目が笑ってないぞ。

少し場が落ち着いたあたりで口を開く。

奥さんのアプローチが激しく止む終えずといった感じではあるけれど。

白を隣の席に座らせてやり、話します。

迂闊だったか、お金を渡すよりこちらのほうが白にとっては安全だろうと思ってしたことだったが、裏目に出ってしまったようだ。

「あまり話したくはないのだがね、マスターと奥さんにはお世話になってのことだし、少しだけ昔話をしよう」

相も変わらずここは私以外の客はいないようだ、聞かれる心配もあるまい。

白にはミルクを注文する。

「今でこそ国は一つとなり魔物も少なくなり、この世界は割と平和だが、60年前のある出来事の前はそれでもなかったのだよ」

「60年前といえば魔王を倒して魔王の称号をもらった英雄のお伽話で有名ですよね？」

「どこにでもある魔王を倒す英雄の話だ、ただ英雄が剣士ではなく魔法使いであったことを除けば、今では子供でも知っているお伽話だ」

「魔法使い？ 魔王って魔法使いなんですか！？」

「それも今から話すとしよう……」

そう、かつて愚かな少年が魔王を打ち倒し魔王という称号を手に入れるに至る物語。

少し長い昔話を始めるとしよう。

「かつて世界は43からなる集落によって成り立っていた

今では誰もが知っている英雄物語の真実を語るとしよう。

「今からおよそ60年程前の話になる、かつて世界は一つではなかった。

50年ほど続いている世界規模での戦争によって大地は荒れ、緑が失われていた。

人々は争い奪い、時に協力し集落を吸収していき強大な組織となっていた。

はじめは2つの国に落ち着いた集落群も我先にと新しい国を立ち上げ新たな戦いを呼び込んだ。

欲深い人間を頂点に増えては争い、減っては分裂を繰り返す、終りの無い悪循環。

その中には戦いを忌避するものもいたが、始まった時代の流れは変えることなどできない。

毎日のように血が流れ、勝者の前に敗者が傳いていった。

世界平和のためなどという理由によって行われる戦争はひどいものだった。

数の暴力、賄賂、買収、敗者を奴隷へと落とし、時には国に火を放ち全てを焼き尽くすこともあった。

かつてより続く長い長い闘争の時代は数多くの国を産み数多くの国を破壊していった。

歴史の分岐点となることになる60年程前のその日、ある国の大通りに一匹の、どす黒い魔力をまとった物体が突如として現れた。

人々はそれに、魔法によつて構成される得体のしれない物体『魔の物』という名前をつけた、これが今の世界へと至る最初の分岐点となる」

一呼吸置くために冷めてぬるくなってしまったコーヒーに口をつける。

あまりにもマスターたちが真剣に聞いてくれているため、喫茶店の空気が止まっているような感覚を覚える。

コホンと咳払いを一つし、続きを口にする。

「魔の物と呼ばれる存在は発生する時期は違えど、世界の各地に次々と現れいつる。

それは次第に猛威をふるい出す。

得体のしれない存在に恐怖した人々が我先にと剣を槍を魔法を、考えうる限りの戦力をぶつけた。

けれども、それはまるで火の粉を振り払うかのごとくその歩みを止

めることなく、むしろ人に襲いかかったのだ。

大の大人がまるで赤子をひねるかのごとく次々と殺されていく様は人々に危機を抱かせた。

数多く存在した国はその中でも巨大だった一つの国を中心とし連合王国を築く。

皮肉にも人々の戦いを止めたのは自分たちが殺されるかもしれないという、ただの恐怖だった。

けれどそんな理由でも、長く続いた戦いに終止符をうち人々を結束させるには足るだけの理由となった。

人々が長く続いた戦いに疲弊していたことも大きく関係していたのだろう。

標的のすり替えとも取れるが、それでも人々に争いの愚かさを再認識させるだけの時間にはなった。

協力し戦う人の前に魔の物たちは為す術もなく次々と倒されていく、皮肉にも50年もかけて人々は自分達で争うことの愚かさを学んだのだった。

順調に進む戦いにも綻びが出始める、季節が一巡りしたあたりから魔の物たちの動きが変わりだしたのだ。

そう、それはまるで指揮官に操られる部隊のように、何らかの目的を持ち進撃する軍隊のように。

人々の間にある目撃談が噂されるようになる。

噂とは『言葉を操る魔の物を見た』といったものである。

そんな馬鹿など、人々は切り捨てるも賢くなつていく魔の物を見るうちにその意見は変わっていく。

そうして誰が言ったのか、世界を震撼させる一つの噂が流れる。

『魔の物の王が生まれた』

どこからその情報が流れてきたのかは誰にも分からない。

もしかしたら魔の物が情報を操作していたのかも知れない。

その噂が流れるようになって以来、魔王がいると思われる箇所において明らかに規模の違う戦略級魔方陣の展開が観測されるようになった。

その魔法は嫌でもその噂を信じるしかないほどの破壊をもたらした。

ひとつの魔方陣から繰り出される雷は街を消し飛ばし、地面に描かれる魔方陣から吹き荒れる業火は国を焼き払った。

やっこのことで平和へと向かおうとしていた人々の希望をすべて壊し、恐怖のどん底に突き落とすには十分すぎるほどの衝撃だった」

少し休憩しようとする私を奥さんの咎めるような目が捉える。その目は「おい、さっさと続きをいいなさい」と言っている。

まったく、年寄りはまだ少しいたわるものだというのに。

「より強くなっていく魔の物たちの襲撃に連合王国ですら対処できなくなった時に、一人の少年が立ち上がる。

その少年が腕を振れば城壁にまわりつく魔の者たちは瞬く間に魔法に焼かれ消滅していった。

滅びへと向かう人々にはその少年が童話に出てくる勇者のように見えたという。

人々は次々に少年を褒め称えた。

曰く魔王を倒す勇者だと。

曰く世界の救世主だと。

曰く王国の危機を救う英雄だと。

なんとも独りよがりな考えだが、絶望と希望の狭間で揺れる人々は彼に頼るしかなかった。

それは狂気にも似た盲信だった。

英雄だと呼ぶ傍ら、彼らはまるでつき出すがごとく彼に戦いを強いた。

少年もまたどこか普通ではなかったことが災いしたのだろう。

当時12になつたばかりの少年には世界を脅かす魔の物の存在など眼中になかった。

時間があれば本を読んでいたその少年には人並みの体力などなかったが、少年には本を読む傍ら鍛え続けた魔力があつた。

当時の同世代の子供にしては変人に分類されるであろうことを延々と続けていたのだ。

人がどう思えどただ少年は本が、文章を読むことが好きだつたのだ。故に人並み外れたその魔力と知識が解放される機会はなかつた、だから誰の目にもつかなくつた。

戦いにおいては国の力自慢が次々とかり出されていったが、兵役を帯びていない12の青年が目につくことはなかつた。

あえてもう一度言うが、少年にとっては本こそが全てだつた。

だから少年が魔の物すら退けられない大人に呆れ、本を守るため、その著者を守るため国を守つたのは必然だつた。

そこに正義も偽善も何もなかつた。

少年はただ己のためだけに魔の物を消し去つたのだ。

だが周囲は少年の事情など考えない、ただ愚直に英雄だとおだて上げるだけだつた。

拳句の果てに、家にこもつてでてこないのはこの日のためだつたな

どと、そんな馬鹿げたことを言うものすら出てくる始末だった。

それほど人々が切羽詰まっていたということでもあるのだろうか。

少年を筆頭とした連合王国は瞬く間に魔の物を退けていった、実際は少年しか戦っていないが、国では王国の連戦連勝だと告げられた。少年もまた未熟だったのだろう、気づいたときには引き返せないところに持ちあげられていた。

王国は少年を最大限支援し、表では魔王を倒す勇者として、裏では使い勝手のいい手駒とした。

会う人会う人が少年に希望を口にし、ある者は手を合わせ、またある者は少年に自慢の武器を手渡した。

彼らに悪意はなく、ただ少年に期待していただけなのだ、自分よりそれこそ少しの努力では追いつけないものに希望を託して何が悪い、そう彼らは信じているのだ。

表では優しい言葉で戦場に向かへと言われ裏では国の走狗となり魔の物を倒す。

少年もまた不器用だったのだ、ただただ疲弊していった、だから少年はすぐにでも魔王を倒す必要があった。

少年は焦っていた、倒せば終わりだと、そう信じてやまなかった。

ちょうどいい具合に向こうも同じ考えだったのだろう、次々と減る味方に動揺した彼らは全戦力をぶつけてきた。

魔の森と呼ばれた住処より出ずる、魔王を筆頭に地平線にずらっと並ぶ魔の物の軍勢は壮観であった。

対するこちらは城壁を囲むように部隊を配置、少年はその前に一人ぽつんと立っていた。

先に動いたのは魔の物の軍勢だった。

地響きを連れて一斉に動き出すその様はまさに天災だった。

それからの出来事は人々の脳裏によく焼き付いていることだろう。

少年はその軍勢に向かってかけ出したのだ、唯一人。

魔の物の群れに少年が飲み込まれ、姿が見えなくなったところから一歩的な虐殺が始まった。

いや、そもそも虐殺と呼ぶのもおこがましい、まさに瞬殺だった。

少年がいると思われる所を中心として魔方阵が展開されていた、それはほうとうに魔方阵と呼ぶのだろうか。

その瞬間世界が紅に染まった、少年が展開した魔方阵は地平線の先へと続いていた、終りを見たものはいないという、もしかしたら世界すべてを包んでいたのかもしれない。

その模様に触れた魔の物は次々と、いや瞬き一つした頃には魔王と呼ばれた物を残して全て消滅していた。

理解の範疇を超えるとはこの事か、人々は空いた口が塞がらなかった。

国を次々と吹き飛ばした魔王ですら戦いを放棄していた、そして語りだしたのだ、己の正体を。

はじめは意識を持たないただの魔力だったという。

長い争いにより無残に朽ちていったものの無念、恨み、後悔、それらに乗せた魔力の残滓はやがて集まり形を成した。

それが私たちなのだと、それをあっけなく消し飛ばすお前もまた化物だなと笑っていた。

愚かしいことだな、己達の行って来たことで己の身を滅ぼす、非肉にもならないと嘲笑っていた。

終わりはあつけないものだった、全てを言い終えた人の姿をしたそれは自ら霧散した。

少年は見聞きしたことを伝え日常へと戻ろうと国へ向かったが、そこに待っていたものはなんとも残酷な人間の本性だった。

あたりは静まり返っていた、人々は誰も少年に目を向けなかった。

人々は口々にこういったのだ、君こそが魔法使いの王『魔王』だと。褒め称える声とは裏腹にそれは単なる皮肉だった、彼らにとって少年は魔王すら倒しうる魔王なのだと、言外にそう言っているのだ。

人々にとって魔王がいなくなった今となっては少年が最後に使った世界を覆い尽くす魔法こそが恐怖の対象だった。

王国は少年の功績を称え、少年に正式に魔王の称号と莫大な資産、そして魔の森全域の所有権を譲った。

極め付きに異例として、国を救った英雄を育てた両親を国の認める貴族とし、王城の側に豪邸を建てさせた。

少年が使う強力な力を封じるために国は人質をとったのだ。

国を救った少年を待っていたのは莫大な金と未開拓の広大な森だった」

乾いた喉を潤す、コーヒーはすでに冷めてしまっている。

「え……あれ？ ちょっと待って、それじゃあエイルズさんって……」

搾り出すように言う奥さん。

私に否定して欲しいのだろうか。

「愚かな少年の末路だ」

今では笑い話にできる苦い思い出だ。

私も当時は若かったのだ。

さすがに、真つ青な顔をした二人をみると申し訳なくなってくる。

「魔王が魔王で、森が莫大な金で、だからカードが黒で」

「黒って金持ちの証じゃなかったんですね、いつも黒ってすごいなーと思ってましたけど実はそんな裏話があったんですね」

落ち着け奥さん、そしてマスター、君は相変わらずだな。

「金持ちが黒を使うというのは意図的に流された噂なのだよ、せっかくだしもうひとつ面白いお話をしよう。」

有名な話として名前を持たない存在がいる、それを人々は精霊と呼んできたのだが、マスターは知らないのだったね。

何故それが物語の中だけで語られるのかということかつては本当に存在していたのだよ。

人々が争い出す110年前まで人は、小さな集落で精霊達とのんびり暮らしていたというわけだ」

だから白の存在はとても凄いことなのだと付け足しておく。
奥さんがやっと落ち着いたのか話しかけてくる。

「エイルズさんっていくつですか？」

「今年で72だよ」

「てつきり50くらいだよ」

マスターがそう言う、奥さんは追撃を食らって意気消沈といった感じだ。

「苦い昔話だ忘れてくれ、今まで通りに接してくれたほうが私も助かる」

「そ、そうですね、ごめんなさい」

「かまわないさ、湿っぽい空気にしてしまったね」

「いえ」

マスターは相変わらずだとして、奥さんも割り切ったのかもとの表情に戻っている。

その後はたわいもない会話をして少し時間をつぶす。奥さんは少しした後もう一度白を連れて買い物に出かけていった。白が少し嫌そうな表情をしていたのは言うまでもない。

秘密を共有し合ったなかというものだろうか？
それからの日々は少し騒々しいものとなった。

私たちは毎日のように喫茶店に通い、普段は裏にいる奥さんも度々顔を見せるようになった。

奥さんが私に魔法を教わりたいと言い出したり、少しずつ成長していく白を奥さんが話攻めにしたりと、とても充実した平和な日々を過ごした。

白の成長速度に関しては敢えて言うまでもなく異常だった。

週が巡ればわがままを言うようになり、また週が巡れば我慢を覚え、また週が巡れば一人で考えるようになり、一月程たった頃には見た目相応の、10歳前後の少女と遜色ない態度をとるようになった。

表情は未だに硬いがそれでも白の成長は異常だった。

そうして何気ない日々がいつまでも続くと思っていた。

いつものように喫茶店へと向かい白は奥さんと、私はマスターと話しているときにそれは起こった。

その時のことはよく覚えている、長い長い旅の始まりとなる出来事だった。

「どうした白？」

異変に気づいたのは白と話していた奥さんではなく私だった。
何かは分からないが白からとてつもない力が溢れている。

「……」

「白!? きゃっ!」

苦しそうにうづくまる白に近づいた奥さんがとっさに手を引いた。そして世界は白に包まれた。

咄嗟に3人に声をかけるも返事はない、姿が見えない。

いや、この場合私だけがここに囚われたのか?

「」名答」

そう答え何もない空間から現れたのは他でもない、あどけない少女の顔に深い笑みを携えた白だった。

昔語り（後書き）

全然思ったように世界を書けないというジレンマ。
少し展開が急だったやもしれない。

始まり

「君の危惧はもっともだが心配しなくてもいい、私は白にとって敵ではない」

彼女は唐突にそう口を開いた。

見た目は白そのものなのだが、どうにも別人のような感覚を抱く。

「いやそれは間違っているぞ？ 白もまた私なのだから」

「それは」

「どういう意味か、だろ？ こほん、この口調は違和感があるな」

そう言いつつも続ける。

「君が彼女に白という名前を与え育ててくれたおかげで白は人としての枠に収まった。

どういう意味だ、と言いたげだね？

心配するな、この話が終わる頃には君は全てを理解しているだろう。君が一番疑問に思っているだろう私の正体だが、私は単に白の可能性の一つでしかない」

「可能性？」

「何故可能性の一つが今ここにいるのかと、君は賢いね一つを聞けばだいたいのことは理解する。」

ああ、私が君の心を読んでいることに関しては気にしなくてもいい、そういうものだと思ってくれたまえ」

無邪気な笑みを浮かべた彼女はそういう。

悪意を向けてこないことから自然と警戒も解けていった。

「もともと白は、そうだね君たち人間より高位の存在として神がいるだろう？ 見たことがなくても構わないさ。」

人間に対する高位の存在が神ならば私は世界に対する高位の存在だと思ってもらえればいい、実際は大きく異なるがね」

理解が追いつかなかった。

夢を見ているのか思ったぐらいだった、信じたくないとかではなく、単純に意味がわからなかっただけである。

「そんなことはどうでもいいんだ、私はある願いによって生まれた存在でね、白がそれを思い出したときに私が表に出るようになってるんだ」

少しの間だけどね、と付け加える。

願い？

「もともと白には幾つかの可能性があった。

白が生まれてくるにいたった願いは単純だ、世界を救う、ただそれだけの話し、けれどその規模は計り知れない。

人に拾われ人として成長していく道、これが白がたどった道筋だけど、可能性としては猫の王となる可能性だつて十分にあつた。

もしくは鳥の救世主かもしれない、蝶の友人として世界を救つたかも知れない。

まあ、人として成長して行つてもらつのが世界を救う近道となるから困つた事にはなつていないけれどね、世界は人が支配しているのだから。

人が世界を支配するなどおこがましいなんて偽善的な考えはよしてくれよ？ これは理想論ではなく現実論だからな」

そうおどけたように彼女は言う。

「正確には知的生命体、広義の意味では言葉を操り世界を支配する存在、になることが割と世界を救う上で楽だから今の白はいい傾向にあるわけだ。

他の可能性としては水晶とかの鉱石なんてのもあつた、所謂賢者の石みたいなね、というより人になることと同じくらいの確率でこの可能性があつたわけだが、それではあまりにも受動的すぎる。

まあ、建前はこれくらいにしておこう、今となつてはどうでもいいことだ、わすれてくれたまえ。

今大切なのは君が白を育ててくれたおかげで白は普通よりはやくこの段階へと至つたわけだが。

おっと、誤解をしているようだからひとつ言っておくが私は唯一にして無二の存在だ、そもそも私の存在がバグなのだからな。

ともかく、白は使命と現実の狭間で揺れているというわけだ。

理由は簡単だ、君が優秀すぎるのだ、故に白は加速度的に成長した、未熟な段階にてここに至ってしまったわけだ。

だから私が出てきたということだよ。

これだけでは少し言葉が足りないか。
白に託された世界は一つではないのだ、いや逆だな、世界はそもそも一つではないのだ。

夢物語だと言うのは簡単だ、まあ経験すれば嫌でも理解するさ。

ここでの問題は这个世界がすでに安定していることと、これは君のおかげだね。

だからこそ白は次に行かなければいけないということだ。

が、そこで君が出てくるわけだよ、大体は理解したかな？」

理解するというよりは理解しろと言われているだろう。

そう思っていると言顔をしかめてくる。

「心外だねえ、別に私はそんなに大層なことは言っていない。

君だとして理解しているだろうに、それに君には悪いのだが拒否権はないのだよ。

ということとは理解しろと言ってることになるのか？

前言撤回だ、理解しろ、でなければ私の大切な白が少し壊れてしま
うからね。

察しのいい君なら理解しているだろうけれど、いや白に対する愛を
理解しろって言うわけじゃなくてだね。

白の行く先について来いってことだよ。

今とつさに目を逸らしただろう、いいか拒否権はないのだよ。

これは免罪符なんだ、といえは大體理解はできるだろう？

白は止まらない止まってはいけない、だからこそ一人目というのは
意味を持つ。

今の白にはそれは無理だ、ああ君を道連れにしてしまったと嘆くだろうな。

君がそういうふう育てたんだ責任を取りたまえ。

この言い方はずるいだろう？ だから君も安心して私の言いなりになればいいのだ」

そう言っ羽を二枚どこから取り出した。

「これは？ 鳥の羽か？」

白と黒の二枚の羽、鳥のものと思われる。

またしても彼女はその口に笑みを浮かべる。

「ハズレだ、鳥ではない、これだよ」

そう言っ彼女が手を広げた時、天使が舞い降りるかのように、鮮やかな羽が彼女の背中に広がった。

およそ幅2メートルほど、私から見て左が白、右が黒の両極端な羽だ、よく見るとそれは光のシルエットとかではなくまるで生きているかのように繊細で、羽の一本一本がとても細かな作りになっている、いやむしろそこの鳥よりも細かいと思われる。

息を飲む美しさはこの事が、もはやそれは芸術と呼ぶ領域だった。

「どうだ魅了されたか？ では私に従ってもらおうか、ほれほれ」

台なしであった。

「こほん、冗談だよ。

これは白が扱う力の片鱗だ、どうしても力が強すぎてね、出力を1%未満に抑えた後に無駄にこんな細かい物体を作り続けることで浪費し続けなければ星が持たないのだよ。
なんともままならないものだよ」

とんでもないことを平気で言っただけ。

「ということとその羽根を体の好きなどろろにかざしてくれたまえ。そうだな腕だとか手の甲だとか、ええいどこでもいいわ、さっさとしないか」

そう言っただけ掴みかかってくる、その時に触れた羽はほのかに暖かかった。

仕方が無いので従う、こんな歳にもなつて何をやっているのだから。手の甲にかざした二枚の羽は淡い光と共に吸い込まれていった。

その後右手の甲には折り重なるようにしてクロスを描く白と黒の羽の紋章が浮かび上がってきた。

しまった、足とかにしておけばよかったと、後悔。

「これで私の目的は達成されたわけだ、せっかくだし説明がてら話

し相手になつてくれないか？

私に残された時間も少ないからね。

別に悲しい意味ではないよ、私から生まれた白もまた、私だということだ。

私の話し方が定まっていけない事が全てを表しているわけだが、白は私たちであり、また私たちも白だということだ。

白が白という自我として成長してくれたおかげで私という存在と明確な境界が存在するのだ、後少しの間だけではあるけれどね。

いなくなるわけではないから安心したまえ、白は私の白という側面なのだから。

おっと、説明がまだだったね」

そう言つて少女はその場に座り込む。

咄嗟にはしたないからやめなさいといいそうになった、彼女がそうしたいというのだから私もそうするとしよう。

「その羽は一種の力を内包していてね、世界を渡ると言つても白にとっては簡単だがそれ以外となると話は別だ、ましてや今の白は不安定だからね。

私ができるのだから白もできるだろうという考えは間違っているぞ？ その羽は白にはできないことだからな、力的な意味ではなく感情的な意味でな。

その効果は停止だ、正確には存在の固定となる。
良かったなこれで君は不老不死だ。

冗談だ、いや不老は冗談ではないがとにかくその笑顔をやめてくれないか、怖いぞ。

続きをいいか？ まず大前提として世界を飛び出すことは誰にでもできる。

驚いたかな、いやそもそも別世界の可能性を理解していても信じていないと言ったところか、まあそれが普通だし正解でもある。

世界を超えることはまず不可能なことだ、何がというともし仮に飛び越えてしまったのなら、その物は行き着く先の世界の存在と擦り合わされ根本的に消滅するからだ、第一、そもそもに時間の壁が存在するからな。

ちよつと銀河の外に飛び出るのはわけが違う、文字通り世界を超えるのだから。

ああ、銀河が分からないのだね？ 世界には無数の星が存在するとは知っているかな？ まあそのさらに外に飛び出すことだと思ってくればいい、そしたらもう一つくらい酷似した星があるかもしれないだろ？

理解はしたようだね、その星に飛ぶのと世界を超えるのではベクトルが違うということだよ。

わかりやすい喩えとするならば、根本的になかったことにされると言えばわかりやすいかな、物理法則の違う世界に行くんだあたり前の事ではあるな。

つまり飛び出すのは簡単でも向こうの世界に突入するのは困難だということだ、力づくでいけば逆に世界を壊してしまうからな。

無理やり突入すると壊れ、巧みに突入しようとすれば消される、そういうふうに出てきているのだよ世界というものはね。

だから誰にも異世界に行くことはできない、神や神子と言った存在が召喚と称して人々を別世界に呼んだりすることもあるがあれは厳密には招き入れることで道を開くわけだ、戻ることができなくなるのは道理だね、真の意味で世界は越えてないのだよ。

余計な話だったね、話を戻そう。

だから私たちは世界の壁を越えた上にその罰を受けながらその世界に向かうことになる。

話としては理解してくれたみたいで何よりだよ、特にその固定の意味を理解してくれたように何よりだ」

そうだった彼女の体がだんだんと透けてくる。
少しの間と言っていたがこれがそうなのだろうか？

「おっと、時間のようだ、まだまだ話し足りないのだけど仕方ない
ね。」

また会える日を願ってるよ」

彼女がそう笑いながら言うので、私はとっさにこんなことを言っ
てしまった。

「ではまた、嘘つきのお嬢さん」

「はっ、はは、それはどうして？」

「話が少し矛盾していたからね」

ついでってしまったのだ。

「まったく、これだから大人は大っ嫌いなんだよ。」

私にそんな感情があるのかと驚いているようだから言っておくけど
私は『弱い』からね。

私を創りだしておいて気づかずに消し去ろうとする私に対する意趣
返しでこんなにも君に話したんだ。

気づいても黙っておくのが紳士というものだろうに、まったく。君が気づいているように私の本質はそれだ、だからまた会うかもしれないね。

だからこそ、そんな君にはこう言い残すでしょう。

『今度はおいしいお茶が飲みたいわ』

なら私はこう返すでしょう。

「マドレーヌでも焼いて君を招待しよう、なに遠慮することはない」

それを聞いた彼女はその顔に最大限の笑みを抱え消えていった。

彼女が見えなくなるとまるで何事もなかったかのように白の世界は一瞬にしてなくなった。

右手の甲に残る二枚の羽が、ただその出来事が夢じゃないことを物語っていた。

元の世界に引き戻された私を待っていたのは白のタックルだった。少しばかり年寄りには辛い勢いで突っ込んできた白は私に抱きつくようにして、珍しく言葉に感情を乗せて言った。

「じめんなさい」

マスターと奥さんが動いていない所を見るとおそらくではあるが、あの時間は一瞬だったのだろう。彼らにはうずくまったはずの白がいきなり飛び出したように写ったみたいだ。

「構わないさ」

「じめんなさい」

白の頭を優しく撫でてやる。

白が謝るということは私が引き返す道は残っていないということだろう、例えば固定の概念を引き剥がすと体が崩壊するといった感じだ。

不可逆などと、かの少女はいたずらがすぎるようだ。

それはさておき、一番厄介なのはマスターと奥さんにどう説明するかだな、骨が折れるよまったく。

さすがに黙っておくわけにもいかず、少しづつ話したわけなのだが。

「え」と

「は、はい」

と言った感じで始めのうちにはふたりともぼけた年寄りに対する感じの返事をしていた。

なんとも失礼な話だが荒唐無稽すぎて話についていけないのはわかる。

私もあの羽と時間停止を見なければ信じていなかったところだ。

けれど私が冗談など一切交えずに真剣に話していることを感じ取ったのか次第にその顔は曇っていった。

奥さんなんて泣き出してしまふ始末、私がこんなにも慕われているとは意外であった。

「ははは、私は君たちのほうが心配だよ、私がいなくなってお店の方はやっていけるのかね？」

「すまないメアリー、この店ももう潰れてしまふ。」

「いいのよあなた、そうしたらどこか深い森の中でひっそりと暮らしましょう」

場を和ますために言った冗談は余計にダメージを与えてしまった。

冗談ではなく本当に私しか来ていなかったのか？

よくそれで食べていけたなマスター、奥さんの収入で生きているの

か……そうに違いない事はわかった。

確か魔法使いを目指してるはずだからこことは別にギルドの収入があるはずだ、と人の心配をしている場合ではなかったね。

「とりあえずマスター、看板は作ったほうがいいと思うのだが」

「それってなんか隠れた店っぽくないですよね？」

それを本気で言っているのなら君は本物だよマスター。とりあえずどうするか、ああ大切なことを忘れていた。

「とりあえずこれをマスターに預けておこう、どうせもう使えなくなるのだから」

そう言っつて黒のカードを手渡す、彼が顔を真っ青にしたのは言うまでもない、そこには王国が転覆するぐらいの資金が入っているのだから。

ところで白はというと以前私が渡した懐中時計をいじっていた、首に下げて服の中に入れていたようだった、何を考えているのかもものすごく気になるが今はマスターが先だ。

「じ、こここんなもの預かれませんよ！」

「そうは言っても私にはもう使えなくなるものだからね」

「なん……そうでしたね、本当に行ってしまうんですね」

「悲観することはない、世界によって時間軸は違つと聞く、私たちにとっては何千年という時間だが、君たちのもとに帰ってくるのは明日なのかもしれないのだから」

可能性としての話である、と言ってもおそらくそれは訪れ得ない未来なのだろう。

私たちが帰ってくるということはこの世界が危機に瀕しているという事なのだから。

帰ってきて彼の入れるコーヒを飲み、奥さんに魔法を教えたい、がそれは叶わないほうがいい願いなのだ。

私に固定化がかかっていることと、おそらく白は変化しないのであるろうことからここで何百年過ごした後移動するという手段もあるのだろう、私がそれを言えば白はそうするはずだ。

それもよしておこう、そもそもそれなら白は謝る必要性は殆ど無いのだ、不老であつて不死ではないのだから。

ただ推測にすぎない、白は何も言おうとしないからわからない、私も別に聞き出したいわけではないからいいのだが。

おそらく白にとっては如何なる事だつて出来るのだろう、故に如何なる事もできないのだ、おそらくそういうものなのだと思う。

「マスターに奥さん、また機会があれば是非寄らせてもらつとしよう、なに、心配はいらないさ、白と共にすこしばかり長い旅行に行つてくるとするよ」

そう言つて私は席を立つ、白の初めて見せる笑顔がここでの最後の

挨拶となった。

「いってきます」

それは控えめだけど、白なりの精一杯の誠意だった。

それに対して二人はその瞳に大粒の涙を抱え震える声で、それでも精一杯の笑顔で送り出してくれたのだった。

「「「いってらっしゃい」」」

帽子を深くかぶり直し白の手を引く、歳を取ると涙もろくなつてしまつていけないね、本当に。

『カランカラン』

名も無き喫茶店のドアに付けられたチャイムが心地よい音を鳴らしていた。

門番の彼はまだまだ若い、だから心配掛けたくないというのはあった、それに彼は優しい。

私の姿が見えなくなれば一目散に森の中に探しに来るだろう、過去にも何度もあったことだ。

「少し旅に出ようと思う、世界を巡ってくるよ」

だから私は自然なふうにならないうつた、下手に約束はしない。彼はとても残念そうな顔をしていた。

「お気をつけて」

そういう彼の顔は少し寂しそうだ。

白に対しては作り笑いを浮かべ元気に挨拶をしていた、やはり彼は素晴らしい青年だよ。

帰路につく。

苦い思い出も今ではいい思い出となった森の小道を抜ける。

少しずつ手入れしたこの庭も、少しずつ増築したこの家とも今日で別れることとなるのか。

部屋に上がった後は手紙を一通出しておく、私が持っていてもう意味は無い本の数々を奥さん宛にしておこう。

彼女は努力家だ、これを全てとは言わずとも大半は自分の力とする
だろう。

「白、行くのでしょうか」

「うん」

かの少女が見せたものと同じ羽を出す。
が、少し様子がおかしい。

「かげん、まちがった」

そこら中に羽が舞い上がる、その羽は何かに触れると霧散していっ
た。

演出ではなく単なるミスなのか。

「ひとつだけ……パラダイムシフトにきおつけて」

だから急ぐ必要があったのか、いや少し考えたらわかることが。
どつりで時間がないわけだ。

私がマスターと奥さんに白の事を話してしまったことも少し原因と
なっているようだ。

本来なら彼らも消すのか？ 特別、ということだろうか。

無表情な彼女からは何も感じ取れない、気にしても仕方が無いか。

白が差し出してくる手を取る。
羽が羽ばたく、あたりにもう一度羽が舞い上がり一瞬にして二人は
この世界から掻き消えた。

ここから始まるのは長い長い旅の物語

始まり（後書き）

というわけで長い長い序章の終わりです。

もっとわかりやすく簡潔に済ますつもりが伸びに伸びた、どうしてこうなった。

それはさておきここから世界救出旅行記本格的な始まりとなります。よろしければノロマな作者を未永く見守ってやってください。

何かお気づきの点がございましたら指摘していただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8184u/>

世界救出旅行記

2011年11月16日02時03分発行